

初期フランドル絵画の彩色技法研究

—国立西洋美術館所蔵 Joos van Cleve 《三連祭壇画:キリスト磔刑》の
模写実験を通して—

1318937 文化財保存学
保存修復（油画領域）
民部有桂

（論文内容の要旨）

研究目的

15 世紀から 16 世紀初頭にかけてヨーロッパ北方地域に興った初期フランドル絵画は、平滑で透明感ある彩色が特徴である。白亜地の白を基調とした明るい色の平滑な下地層の上に、透明や不透明の油絵具による下層彩色を薄くのせ、その上から仕上げに透明な油絵具を薄く重ねて描かれている。画中に描かれる空や大地、人々の色とりどりの衣服、また柔らかな肌は、それぞれの色が大変鮮やかに澄み渡っている。本研究では、この彩色の美しい透明感について着目した。本研究では、国立西洋美術館所蔵の 16 世紀初頭に描かれた初期フランドル絵画 Joos van Cleve 《三連祭壇画:キリスト磔刑》の模写実験を行い、その彩色技法の特徴である透明感の再現を試みる。Joos van Cleve は、16 世紀前半にフランドル地方で大工房を構え、卓越した技術と優美な色彩感覚で活躍した職人的画家である。

本研究の目的は入念な肉眼観察と光学調査の結果を利用して、初期フランドル絵画の彩色技法を再確認し、平滑で透明感のある彩色の工程に対し模写による再現を試みることにある。模写に当たっては原作品制作当時の絵具を含む画材の情報に不詳のものが多いため、今回は仕上がりの色味と外観を重視した現行の油絵具を主に使用し、彩色手順の検討を主眼とした。

本研究にあたり作品を所蔵する国立西洋美術館で熟覧調査と部分拡大写真および赤外線反射写真の撮影を主とする光学調査を行った。X 線透過画像の撮影は所蔵者側の諸事情で行えなかった。このため、Joos van Cleve の他作品を含む初期フランドル絵画作品 5 点の既公開 X 線透過画像を参考にして Joos van Cleve の技法的特徴を類推した。こうして得た事項を参考に絵画制作者の視点を活かした検討を加えながら、特色ある複数の部分について模写制作を通して透明感ある絵画の再現を試みた。

論文構成と研究結果

序章では、本研究の背景とその目的について自らの制作体験と関連付けながら概説した。

第 1 章では、西洋絵画技法の先行研究を概観した。先行研究は、19 世紀から 20 世紀前半までの古文書の発見と解説を主とするものと、20 世紀後半以降の自然科学的手法を応用した保存修復に伴う新事実の発見と検討、さらにはそのための技術開発に関するものに大別できる。前者の主な業績は Charles Lock Eastlake、Mary P. Merrifield、Albert Ilg、Ernst

Berger、Daniel V. Thompson などによるものである。後者の主なものは Paul Coremans による van Eyke 《ヘントの祭壇画》調査修復報告(1953)や長波長赤外を利用した J.R.J.van Asperen de Boer による同作品の再調査 (1967)、1990 年代に始まる ロンドン・ナショナル・ギャラリー科学研究室による一連の初期フランドル絵画の所蔵品調査研究などがある。本研究では、顔料とメディウム、下地層のプライミングなどに関する情報はロンドン・ナショナル・ギャラリーの報告を参考にした。

第 2 章では、前記の初期フランドル絵画 5 点の X 線透過画像に基づいて、白色絵具とくに鉛白の使い方に注目して比較し、Joos van Cleve の特色を抽出した。次に、国立西洋美術館所蔵作品の赤外線画像から、下素描での線の描法と表層彩色の筆の動きを比較して、輪郭線・線描・彩色の関係を考察した。

第 3 章は模写実験の記録である。対象作品から 1 辺が 10 cm の正方形の範囲を 15 箇所選択した。その後、模写に用いる現代の材料と道具を検討し、その上で透明感を再現することを目的とした再現模写実験を行なった。絵具の重ね方、メディウムの量、下地層のプライミング、表層彩色の筆致方向、下素描などを調整し、異なる手法で 9 回の実験を行なった。

終章では、初期フランドル絵画の特徴には、暗い色による輪郭線の描写や形に沿った輪郭線内部の線描、発色の良い不透明な絵具による下層彩色、透明色の絵具による上層彩色などが挙げられ、再現模写によってこれら全ての要素が透明感と結びついていることを明らかにした。

本研究は、初期フランドル絵画の透明感が生まれる仕組みを導き出すため、これまでに発表された技法研究史を振り返り、研究対象作品およびその類似作品の絵画構造から実際の彩色技法の工程を導き出した。熟覧調査と写真情報だけでも、再現模写を組み合わせることにより、自然科学的な情報が不十分な作品についても、ある程度までは技法材料を推測できる可能性を示唆した。